

津田昇平教話 第三五七話

令和三年十二月二三日 朝の教話

祭典は無言の教導である。

おはようございます。令和三年十二月二十三日の朝をお迎えすることができました。

今年一年を振り返って、とてもありがたかったなあと思うことの一つに、御祭典のあり方に絞しぼってお話をしようと思います。

以前までは、参拝者も多く、まあそこまで広いとまでは言えないお広ひろ前に、百人ほどの方がお参りをして、共にご拝礼申し上げることができて、月例祭の度に百人ほどというのは、まあなかなかいいことで、そう思うだけでも、非常におかげを頂いてたなあと思うんですが。

それはそうとして、このような社会状況の中においても、遠方の人で

も、お広前でそのまんま頂くということではできずとも、ユーチューブを通じて、ほんとにその時間、リアルタイムで、それぞれの頂きたい、頂ける場所で、それが自宅であったり、あるいは職場の片隅であったり、場合によったら車の中だったり、ファミリーレストランのところであったり、それぞれの状況があるにせよ、そこでお参りをする事ができるといふその形が、去年もそうなんですけれども、今年も続けておかげを頂けたなあというのは、非常にありがたいことだったと思います。

お教会によりましたら、お祭りはもう少人数のことだから、お参りをされて、お祭りを頂くということができているお教会も多いと思います。今は、だんだんその方が多くなってきたかもしれませぬ。ただ、尼崎

教会で、今それをするとやはり、数人、三人五人とかね、多くても十人程度であればまあ、そのお広前がどれぐらいのお広前か分かりませんが、まあ問題ないかもしれませんが、でもこの空間に、八十人、百人とは言わずとも、八十人、七十人だけでも、それでも大概、いっぱいなものでね。少しスペースを空けてということになったら、もうなかなか難しいですね。まあそれこそ、十五人とか、まあ十人十五人、二十人やったらちよっともうすでに多いかな、と私は思います。

お広前もいくつかに分けてますけれど、お広前の真ん中の正広前せいひろまえにてなるとそれだけでもまあ、二十人入るか入らんかぐらいに思いますよ。そう思ったら、じゃあ他にお参りをされたいという方は、もう立ち入り

禁止じゃないけれどもね、そうなってしまつというのも、どうかなあ……とも思いますし、また状況が変われば、緊急事態や何やということだつてあり得る話でも、その度にドタバタするのもどうかと思いますし、それよりは、それぞれの持ち場立場で、今、お広前に参つて、お祭りを頂くということが叶かなわない状況でも、それぞれ信心のお稽古けいこをさして頂くとはできませんし、これまでが当たり前じゃなくつて、有り難あいことやということをよく分からせて頂く、そういう時間にしてもらえたらと思います。

そういう中で、今年もここまでお祭りを一度も欠かすことなくお仕えることができ、また、配信もすることができているということとは、非

常におかけを頂いてのことやったなと思います。

また、そもそもお祭りというのは、私と神様と一対一で仕えるもの
あります。昔、少し話をしましたけれども、神様にお知らせ頂いて、真夜
中の二時、一時か二時へらいに起こされて、起こして頂いてって言った
らいいんかなあ。まあでも、起こされて、そして「今から着替えて、祭服さいふく
持って、膝衝ひざうち持って、あそこに行け」って言われて、言われるまんまに、
どこに行ってるかもよう分からんまんまに、気がついたら山奥の方に、
暗ーいところに行ってるね。そこで「着替える」と言われたら着替えて。真
つ暗闇やみの中で、お月様だけ照ってるようないところだね。獣けものの鳴き声やら

唸り声うなやら、そういったものもする中で、誰もいない中でねえ、風だけが吹いてるようなところで、「今からお祭りを教えてやる」って言って頂いて、そしてお仕えさしてもらうことができました。

それが私の中でまあ全てですし、これがお祭りなんやなど。ほんとに極端に言ったら、そこで毎回、お祭り一人でお仕えできたら、まあそれでほんとはいいんです。っていうかまあ、それが本来なんでしょうね。
天地金乃神様てんちかねのかみにご拝礼申し上げる。金光大神様こんこうたいじんにご拝礼申し上げる。ま、それで全てなんでしょう。

あとは、ただそこに置いて頂けるかどうか。まあ、盗み聞き、盗み目、盗み見さしてもらうことができてるような、ただそこにお邪魔じやまにならな

いように、もう木の葉っぱになるなり、木の葉になるなりして、お邪魔にならん程度に、そこに置いて頂けるといいうことが、お祭りを頂くといいうことの原則になるわけですね。

お許し頂く代わりに、邪魔せんように、というところになります。邪魔するんやったらもう、お祭りには頂くことはできないっていうことになります。まあ当然なんです。それをやはり、もう昔に教えて頂いてきましたんでね。

で、それに一番近く、近い状況になったなあと思ってます。楽人がくじんもなしにしましたし、ま、それも非常にすっきりしましたしね。祭員さいいんも一人にできました。これも非常にありがたいことでした。

神様と私のお祭りに、あまりお邪魔にならん程度に氏子うぢこが参らして頂たまく。遥拜とほひのみさして頂たまく。その姿を、それこそ、草葉くさばの陰かげ※から拝ひらまして頂たまく。そういう感じができてるといことが、非常に、本来のお祭りのあり方ということ、教えて頂いてきたなあと思います。

教祖様が金光大神祭りというのをお仕えするように言われても、まあ元はと言えば、お一人か、ご家族いるかどうかぐらいでしょう。その日一日というものがお祭り日ですから、それぞれの都合で、その日にお参りをし、おかげを頂かれたら、それでいいなあとも思います。

でも、お祭りをぜひ頂きたいという思いの方もおられるでしょうし、できることなら、参列をお許し頂きたい、典楽てんがくをお許し頂きたいという

願いを持たれる方もいるでしょう。

そもそも、参列をさして頂いてる人というのは、それがないと立ち行かん人間で、典樂をさせて頂くと言っても、それがないと立ち行かん間で、ただそれを、機会を、ま、参拝もそうですねえ。お許し頂けるということとは、いろんな罪、穢けがれ、ご無礼、お粗末、不行き届きをしているにも関わらず、それをお赦ゆるし頂いて、免罪めんざいして頂いて、その上で参らせて頂く。拜ませて頂くことを、許可され、許され、その上でお参りをさせて頂く。

じゃ、なぜそんなことを、罪穢つみけがれがあっても赦されて、そしてまた許可して許されるんか。そう、氏子のためになるから、そうさしてやらんと

いかんという思いだけで成り立ってるわけですね。そもそも、このお広前っていうのは、氏子が助かるために、ご用意して下さってる。ただ、それだけの話です。

教祖様にしてもそうでしょう。教祖様だけの信心であれば、別にお広前はいらなかったでしょうねえ。誰のためでもない、氏子のためにということがあります。この尼崎教会にしても、全くおんなじことですね。

まあ当たり前なんですけれども、この当たり前のことが、だんだんと抜け始めて、恐ろしい考え方になってしまいがちですから、ほんとに当たり前のことを当たり前のこととして、きちんと押さえられて、教えられるようなお広前じゃないとまあ、ない方がいいなあという気もします。

そういう意味じゃあ、お祭りという、一つの信心の中身。ご神事をお仕えするにあたって、非常にシンプルにならして頂く。シンプルになるということは、いろんなものを、不要なものを削ぎ落として、ほんとに神髓のところだけを残して頂けるということになります。

ユーチューブ配信もやめて、まあそれこそ、家族も在籍教師も排して、ただ私と神様だけでお仕えする。ほんとにはそれでも全然いいっていう、まさにそれが一番美しいんだろうと思います。ただそれでも、そうされないのはやっぱり、氏子がおかげを頂けるようにということをお許し下さってのことやなあと思います。

かぶさ

祭員が最近ちよっと一人、また一人と、まあ神様が「増やしてやね」と言ってお下さる。ま、私としてはね、ない方が楽なんですよ。やっぱりいるとね、いろいろ考えちゃいます。別に気い使うというよりも、邪魔せんかかっていうことが気になるんですよね、美しいお祭りを。置いてあげるから、その代わり、もういらんことせんといっちゃっていい。私と神様とお祭りを、邪魔せんといっちゃっていい、ただそれだけの気持ちでね。

でもまあ、神様の思いというのんは、その、参るひまゑの守まもが参列させて頂きたくて参るんですが、その広前が立ち行くためにおかげを授けてやらんといかんから、参らしてやろうということになってきます。また、参拜さんぱいやら典楽てんがくということにしても、そうなっていくことでしょう。

今回、元日祭から、神様が「吉備舞きびまいだけ許してやれ」と言われましてね。言われたのはまあだいぶ前でしたけれど、でもそのように言って頂いて、「うーん、そうかあ…」と思ひましてね。だんだん元に、元にといいうか、また増やしていくんかあと思ったり。その分非常にこう、エネルギーを使うと言いますかねえ、気を使いますよね、お邪魔にならんように。ない方が美しいんですよ。こんなこと言うたら、一生懸命がんば頑張ってるのになんて思うかもしれませんけどね。ご厄介やっかいをおかけしてるんです、実際は。おままごとですからね。それを勘違いかんちがしたら、話になりませんが。

ただそこに置いて頂くという、それがどれほど勿体ないもったいことかという

こと。有り難いことかということ。しかも、それだって別に、神様のためでも私のためでも何でもなくて、その人自身が助からんから、助けてやるためにという思いで、神様がご用意して下さってる。まあ、ただそれだけの話です。

この、当り前の話がよく分かるかどうかということが大事ですねえ。この典樂一つ取っても、それぞれ、信心の共励きょういをされたりする中で、お育て頂いている部分もあるかもしれません。ま、それで結構なんですけれども、じゃあ信心、仮に深まったとして、お気付け頂いて、改まりを願ってお稽古けいこして、で、信心成長したとしましょう。でもね、頂けてたおかげが、だんだんと頂きにくくなってあるなあ。信心は成長してるようやけ

れども、実際に頂けるおかげは後退してるなあっていうのは、まあ結構見ますよね。

別に驚きでも何でもなくって、まあ、そろそろやろうなあと思ってるんです。元々、そういうお許し頂くとすることは、お許しを頂かんと立ち行かんだけの話で、それを特別に許して頂いて、特別に真まことを供えるチャンスを与えて頂いて、そのお与え頂いた、恵んで頂いた機会で、助けてやろう、おかげをより授けやすいようにしてやろうと、その御心みこころ一つでして下さってるだけの話です。

なので、まあどんなに信心が深まろうが何しようが、それで立ち行くんであれば、もうやめたらいいし、でもやっぱり、それじゃなかなか立

ち行かんなあってというのがありましてね。まあそれを見て、こつ見ながら、お結界座けっかいってるといろいろ見えますんで。まあ信心は、少しこつお育て頂いてるようやけど、なかなか頂いてるおかげもそう簡単じゃないな。これまで頂いてたおかげもだんだん、じりっじりっした後退していくわなあということを、やっぱり見て感じますよね。

まあ、別にそろそつだと思ってるんですが、信心が成長したら、おかげは大きくなるんです、本来ね。ま、そろそつなんです。それも当たり前なんです。でも、それができないっていうことは、そもそも特別に頂いてただけの話で、それを、お許し頂けないということは、頂けるチャンスというものを、おかげを頂ける、もっとおかげを頂けるところを、止と

めて頂いてる。ま、これお差し止めですから、原因はまあ自分たちの信
心にあるわけですが。

それでも、その様子を見ながら、やっぱりおかげ頂いてもらわんとか
わいそうやなあ。このまんまじゃ、また立ち行かんようになるなあ、一
家も。気の毒になあ…と思いつてる中で、なんとか神様もお許し下さって、
さしてやろう、もう一度、何とかさしてやろう。「金光大神こんこうだいじん、ちょっと辛
抱してやれ」っていうことで、祭員一人増やしたり、楽人がくじんのことを少し
考えるようになったり、また取次とりつぎ唱詞しやくしであったり、そういう機会も与え
てあげんのがいかんのんかなあ、ということをお話をずーっと、まあ
神様とお話ししながら、お祭りのあり方ということと、氏子を助けるた

めのお祭りのあり方ということについて、私も改めて、神様に見せて頂き、お祭りとは本来どういうもんなのか。で、ただそこに、草葉くさばの陰かげから拝まして頂く。まあほんとに、そのお祭事まつりごとに、その場に置いて頂けるということが、どれほどのことなのかということ。それはやっぱり思うわけですね。

令和になる時に、先の天皇陛下、今の上皇じょうこうから、現天皇陛下に代わる時に、ご祭事まつりごとが仕えられますね。ほんとに大事なご祭事ってというのは、やっぱり見えないですよ。非公開ですよ。全く覗のぞき見るということができないですよ。本来そういうもんです。

そもそも、お広前ひろまへというものもそうですし、神様にまみえることがで
きるお広前がいつも開あいてる。これも考えてみたら、えらいことなんで
すが。でも、お祭りというのは本来、そういうところがありますね。今で
もやっぱり私、ちょっと遠くからやったら御扉おひら見れますけど、内殿ないでん入っ
たらね、御扉見ることにはやっぱりね、恐ろしいですよ。今でもそうです
ね。まともにね、見れないんです。御扉見たり、金具まで見れないです
よ、いまだにね。もう畏おそれ多くてね、怖いんですよ。怖いですが、し無礼
やなと思ってますから。だから御神前ごしんぜんに入ったら、上を向くなんてこと
はやっぱりできなくて。少し下にして目を合わさんようにっていう思い
で、やっぱりなりますね。

金光様のお出ましてもそうですね。金光様のお出ましとかお退ひけでも、まあ、ちっちゃい時はね、パッと、どんななかになって見ますよ。今でも、もしさせて頂こうと思ったら、チラッとぐらい、そら盗み見しますよ。でもそれ、盗み見だね。ほんとに正しい作法で言ったら、金光様の影を見ることは許されても、下駄げたすら見ないようについていうふうにして言われるぐらいだね。音を聞く。で、せいぜい影を見る。これで見聞きですよ。下駄の音を聞く。そして、影だけ見せて頂ける、特別に。それ以上なったら、直接姿が見えてしまったらご無礼になるから、頭を下げておくということになってくるんですね。

昔からこう、日本人なんかは、位の高い方に対して、直接まみえると

いうことは、当然、非常に不敬ふけいであるよ、ご無礼であるということですからまあ、御簾みすにしてもそうですしね。まっすぐ前を見たら、お付きの人が「無礼者」で、切り捨てられてもしようがないようなことです。でもそれも、さもありませんで、やっぱりこう、目を見るとか、お姿を見るといいうことは、非常に畏れおの慄のぞくようなことやなあと思います。それだけ、正しく感じるいことができてるかどうかの問題ではあるんですが。遠くからやったら私ね、御神前ごしんぜん見れるんですよ。御神前見たいなあと思ったらね、御神前の中になんて入りません。だって見れないからね。美しいなあっていうふうにして見たいなっていう時って、いつもお広前の真ん中か後ろの方行きますよ。後ろ広前に座りますね。そこで「ああ、

美しいお広前やなあ…」と思います。

遠くからやったら、まだ拝ましてもらえますよ。中に入ったらもう、見れないですね。今でもそうですよ。今日もそう思いましたしね。見る時は、もうほんとにね、顔はもう下向してるけれども、チラッと、ほんとにチラッとね、こっそり盗み見るんです。目えだけちょっと上見せて、チラッと見て、あ、見てしまったと思って。わあ、えらいもん見てもうたと思って、ほんで頭下げて、ありがとうございます、ですよ。

でも、これが本来ですよ。まあ、私が教えて頂いた神様のまつ祀り方っていうのは、だいてんちそういうことです。お祭りのあり方にしても、この大天地のどねほど、もう怖かったですよ、本当にね。神様のお力というものも庄

倒的に、真っ暗な中で、ウワァー、ウワァーってね。何のもう、獣けものなのか、何かも分からない天地の蠢蠢く音いうものを、耳でもたましいでも聞かされてね。ただ震え上がる中で、落ちている木であったり、折って、そしてそれを、お供えさしてもらったり。それが、風が吹いて、闇やみの中に吸い込まれてったりね。ああ、玉串奉奠たまぐしほうてんとはこういうものかと思ったり。まあそういうものを教えて頂いて。

で、この話を以前ね、したことがあってから、何人かの人、特にそうです。ね、お祭りを一人で頂くようになって非常に、遥拜やうはいさせて頂いても、とても落ち着くということ。いかに自分たちも含めて、お邪魔じまになつたのか。祭員さいいん、典樂てんがく、参拜。それも、お邪魔になつたのかということ

感じずにはおれないということ。さらには、一人でお仕えさせて頂いてると、ああこれは、大天地の中で、天地金乃神様と金光大神様の二人で、お祭りを仕えさして頂いて、何の音もないけれども、まるでその闇の中やみの木の葉の音やら風の音が、ゴオーゴオー、サラサラ、サラサラとしていたような、天地の大いなる命、宇宙の命の声というもの、音というものをを感じる中で、お祭りがお仕えされてるのを感じた、というふうにして言われる方がおられましたね。それは本当にその通りですね。その方の目というものは、正しいと思いますね。それを感じることができて、有り難いあがた、勿体ないもったい、畏れ多いおそと思われるのは、非常に、神様とされても、私も、ああ良かったなあと思います。

まあそうですねですけども、だからそれでいいっちゃそれでいいんです、ほんとにね。こっから先というのはもう、プラスアルファじゃなくって、それが百ですから、極端に言ったらマイナスになっていくんですよ。でも、それでも、じゃあなぜマイナスになって、お祭りの美しさとしてはマイナスになるのに、そこに入れようとするのか。参列させようとするのか。典樂させようとするのか。参る機会も何とか与えてやろうとされるのか。それみな結局、氏子うぢこのためなんですよねえ。ただただ、その氏子のため。その広前の、まあ守まもというよりも、その守は、その広前の守の氏子のためにあるだけの話ですから、そのお広前の氏子のため、御道おみちのために、やはりそれを参らしてやらんといかん。供える機会を恵んで

やらんといかん。参らしてやらんといかん。遥拝でも、拝ましてやらんといかん。してやらんと立ち行かんから、だからお祭りをさして下さってるんやなあ、許して下さってるんやなあということをやっぱり、改めてね、この一年を通じて思わして頂きました。

この当たり前のことなんですけれども、この当たり前のことが、当たり前のこととして、きちんと正しく、分かることができるのか。どこか自分は偉くなって、神様より上になる。金光大神様より上になって、自分の立ち位置、立場というものをわきまえることがない状態になってやないか。ま、今でもそんな人、おるかもしれませんけどね。

そらまあ置いていて、ほんとに真まことの信心を求めていこうと思ったら、
神様と人間との、本来の間柄というものをよう分からんとあきません。
頭だけじゃない。体で感じていくことが大事です。だからお広ひろ前の姿、
形、莊嚴まじらさ、静肅せいこさというところが大事になってきますね。

「祭典は無言の教導まつりである」ということを言われます。これは昔から
言いますね。無言ですから、言葉はないんです。無言の教導、教え導く。
お取次とりつぎを頂くとということも教導の一つですし、お話を聞くとということも
教導の一つですね。

でも、御祭典というのは、無言の教導である。自分に対して何か「こう
しい」「ああしい」という教導を頂くわけじゃないけれども、でも、それ

を見ながら、人間と神様との間柄、神様と金光大神様の間柄、神様と金光大神様に、ご無礼、お粗末、不行き届き、罪、穢れけがを赦ゆるされながら、そして特別に許可を、許されてその場にいさして頂く。遥拝まはらいでも、拜ませせて頂く。許されてるといふ、それがまあご愛情なわけですが、そしてようやく立ち行くような、そういう人間であるということ。それが人間本来であるということですね。

それが神様と人間との、本来の間柄になるわけですが、それをまた、教えようとして下さっているということが、私はまあ、ほんとに勿体もったいないことだなあと思います。

そういうお祭りのあり方、どれほど神様がご愛情をもって、これまで

お参りだつてさして頂くことができてたのか。まあそういったことを、お祭りも、参列も、典樂も、てんがくお花のご奉仕も、何でもそんなですけどね。しているなんてことは何ひとつもなく、するという心にはおかげはないですよ。だつてご無礼ですもんね。偉そうやし、お前何様やねん、で終わつてしまいます。

何もできんくせに、ねえ。ほんとにめぐりしか積まんくせに、ということですよ。にも関わらず、金光大神様差し向けて、そして信心する機会も与えて下さり、そしておかげを頂ける。頂けないはずのおかげも頂いて、立ち行く道もご用意して頂いて、そして、参拝も参列も、ご奉仕さして下さる機会もお恵み頂けているという事は、ほんとに、ただただ、

自分のことを立ち行くようにと、特別に機会を恵んで下さっている。この当たり前のことが、当たり前のこととして、少しでも分かる機会をご用意して下さいということは、非常にありがたいことやなあと思います。しかし、私も、ま、久しぶりに楽をさせて頂いたようにも思います。

でもまあほんとに、私としてはね、もうこれで良かったなと思ってるんです。ほんとに良かったなあと思ってます。ユーチューブの配信もね、もう止めたいなあと思いましたよ。だって、それで本来ですしね。でもまあ神様、それは許されませんでしたし、また今度は反対に、祭員さいごんを一人、また一人と増やそうとされたり、これもやっぱり氏子うじこがかわいいんやなあ神様、と思ってる。

また、元日祭では、吉備舞^{きびまい}だけでも許^{ゆる}そうとして下さるその愛情^{おほい}、思^し召^めしということも、なんて勿体^{もったい}ないことなんやろうなあ、楽人^{がくじん}は幸せやなあと思いますよ。まあ、どれだけ分かってんのか知りませんが。

まあでも、心得が違ったら、いつでも止めたらいいことだね。別に、ないのが基本で、ないのが良くて、ないのが一番美しいということを分からんようでは、どうしようもないでしょうけどね。それはもう、皆が分かつとかんといかんことやなあと思います。その場に、許されて、できるだけ草葉^{くさば}の陰^{かげ}からこっそりと、拝見^{はいけん}させて頂く。見ちゃいけないものを見させて頂く。それぐらいのことやと思います。

ちなみに祭員^{さいいん}が参向^{さんこう}する時もね、頭を下げて、ほんとは、お装束^{おしょうぞく}は見

えないように、まああんまり、建物の中で影は見えないでしょうけど、
衣きぬす擦れの音を聞くんです。衣擦れの音を聞きながら、ああ、生神様がご
参列されている。金光大神様ご参列されているということを感じて、畏おそ
れ多いなあと思って、それが本来なんですね。

まあどうぞ、お祭りのあり方というものを、この一年を通じてまた改
めて教えて頂いた。このありがたいお祭りというものを、こっから来年
に向けて、どのようにして神様がお許し下さるのか。それは氏子うじこ次第の
ところ、祭員まつりいん次第、楽人がくじん次第のところでもありますが、恵んで頂いている
という、この一年を通じて、当たり前のこと、天地てんちの道理どうりということす

けども、その天地の道理、神様と人間との間柄、神様と金光大神様こんこうたいじんと氏子の間柄、無言の教導まじひ、何を教導してるのか。神と人との、その関係性ですよね。それを表して、教えて下さってたわけですから。それをまた忘れたら、まあどうしようもないでしょう。

てんがく 典樂だつて別になくしたつていいんです。ほんとにね。楽器もよそのお教会、欲しい人にゼーンぶ売ったら、やー、ええものを集めさして頂いてますからね。そら皆喜ばれますよ。ええ。でも全然いいんです、ほんとはね。まあそれもほんとにね、考えますよ。今だつて考えますよ。うん、全然構わないです。でも、ただ氏子のためを思つて神様がさしてやれつて言うたら、やっぱりさして頂くと思ひますし、全ては氏子が助

かるため、とは言っても、心得が違うんやったらせん方がいいですよね。
だってめぐり積ませるだけですからね。

たまに典樂でもね、教会の先生によっては、「来て下さってありがとう
ございました」って頭下げてるところがあって、潰れるやろうなあと
思ったら、やっぱり教会ごと潰れていきましたよね。うーん…いくつかあ
りますよ。楽人さんが、偉そうになっっていくんですよ。で、そんなとこ
ていうのは潰れますね。信心もおかしくなってますしね。結局やっぱり潰
れていくんですよ。だって間違ってますもんね。

でも、それも何が正しいか、正しくないかをよく分かってる守まもりやない
と、導いてももらえないから、しょうがないかもしれませんが、でも、本

来あるべきことというのをきちんと踏まえて、わきまえて、人間として生きていくということは、ほんとに大事なことやなあと思います。

お祭りというのは、本来そういうもんです。普段、好き勝手に自分たちの都合で神様をね、いつでも、トイシしながらでも、お風呂入りながらでも、着替えながらでも、もう素す裸はだかでも、神様神様言つて、呼び出しては、おかげ下さい下さい言つたりすることも多い。金光大神様、金光大神様みつひかりって、御み霊たま様まを使うことが多い。それは、普段は普段でそれでいいんです、それで。おかげ頂ういてくれたらね、嬉うれしいですから。でもそうではないかって、ほんとに、お祭り、御祭典とは一体何のためにあるのか、ど

ういうもんなのかというものを、ほんとう、よくよく、少しでも、分からして頂かんといかな。でもその機会を、また今年一年、神様が、私たちにお与え下さってたなあということを思います。

まあどうぞ、この一年のことをよう忘れずに、ありがたいことをありがたいこととして分かるような、当たり前のことが、当たり前のこととして、正しく分かるような、そういう、神様に喜んでもらえるような、人間らしい人間にならして頂けるように、お願いしております。

これがまあ、今年非常に頂いた、大きなおかげですね。お祭りを非常に美しく、麗しくお仕えさしてもらったことができました。私がお祭りを

お仕えしてきた中でもまあ一番か、一番美しかったかなあと書いても過言じゃないと思います。正反対に、賑にぎやかなところでお祭りを仕えてきた、一回ね。それもそれで、結構やったと思ってますよ。それはそんな時でね。でも、本当の神髓しんずい、お祭りの核かくの部分を、今回また改めてお仕えさしてもらう機会に恵まれたということを、非常にありがたいことやったなあと思います。

仮に、どんなに百人千人でお祭り仕えようと、本来は、それはみんな、千人みんな、こっそり陰から拝ましてもらって、それがお祭りだということ。まあその当たり前のことを、よーうよう、ようよう分からして頂きながら、踏まえながら、偉そうにならんように、自分の分をわきまえな

がら、謙虚けんきよに、どこまでいっても人間です。神の子といえ、所詮しよせん人間です。そのことを、よう分からしてもらわんといかんなあと思います。

どうぞ今日も一日、どうぞ神様のこと、また、金光大神様こんこうだいじん、自分という、その当たり前のこの縦軸たてじく、天地てんちの道理どうりをよく理解した上で、そんな神様にかわいいと思って頂いて、おかげを授けて下さるうと、金光大神様、教祖様を差し向けて下さり、そして、日にちみ教えを下さり、自分たちの心得違こころあひだいをお気付け頂き、心得を少しでも直して、おかげが頂ける私たちに育てようとして下さってる。それをありがたく思わせて頂きます。そのありがたいことを、ありがたいこととして、感謝できながら、今日

一日もびじろぞおかげを頂いて下さい。

よくお参りでした。

(了)

※ 編集者注 「草葉の陰から」という表現（9、19、32 ページ）について

「草葉の陰から」は、一般的には「あの世から」という意味で用いられることから、そのご真意について親先生（津田昇平先生）にお伺いいたしましたところ、「あの世にいるくらい遠くから、たましいだけでそこにいて覗いたらよいという意味です。まるで幽世の御霊のように、御霊だけがそこにあるかのように、そして肉体はそこにないかのような具合で、差し障りにならないように静かに座っておくように」という意味です」とのお言葉を頂きました。



津田昇平教話 第三五七話

令和三年十二月二三日 朝の教話

令和四年二月十四日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
